

教室史

歯科保存学第I講座(保存学教室修復学講座)

・昭和53年までの沿革

大正9年、東洋歯科医学専門学校の認可とともに、歯科保存学第I講座(保存学教室修復学講座)の前進は発足されている。当時は、歯科治術学と呼ばれ佐藤運雄、川合 渉、横地秀雄および松田理一らが担当していた。

関東大震災の大正14年、神田駿河台に日本大学歯科校舎、付属病院が移転し、この頃から保存部という名称が始まり、初代保存部長に高橋 寛が就任した。

昭和5年頃には、保存治療科、充填科およびポーセレン科などが専門科名として認められており、保存部には浅野武男、山村総次、蝕取章友らが所属し学生教育にあたり、臨床教育では班制度が設けられていた。また、院内では保存部が最多人員を占め、唯一の分離独立した医局を持つようになった。この頃、佐藤運雄が著した歯科充填学改訂版の発行に必要な資料作成に高橋 寛、松田秀喜、山村総次および内田晋次らがあたった。当時の充填は、すべての窩洞に金箔が用いられていたが、ポーセレンインレーも保存部に属し、院内生は臨床あるいは模型上で必ずポーセレン修復を履修することになっていた。

昭和10年に完成した新歯科病院(現在の3号館)には、保存部がその2階と3階の一部を占め、大診療室、保存技工室、医局研究室が確保された。さらに、昭和13年以降に保存部の機構は一大改革がなされ、白土寿一が二代目の保存部長となり、山村総次が副部長となった。

昭和16年頃、太平洋戦争の戦時下、本学主催の一般臨床家に対する臨床歯科医学講習会が行われ、保存部からは白土寿一、山村総次、尾形利二、佐藤 重、稻東勝弥および笛子信一が講師として参画した。昭和18年には、佐藤運雄が日本大学学長に迎えられ、歯科長に中川大介、学監に鈴木 勝が就任し、新体制がとられた。翌年、戦局が厳しくなる中、白土寿一、尾形利二および浅野武男は日本大学医学科臨時医專に編入学し、保存部長が不在となつたために山村総次が保存部長代理と院務主任を兼務した。

昭和20年、終戦を機として、日本歯科医学界の教育制度が専門学校制から旧大学制、さらに新制大学、大学

院制と急進した。この頃、医科に編入していた諸氏が医科を卒業して保存部に復帰し、保存部長の白土寿一は学監となり、保存部一同は戦後の復興に努力した。翌年には、歯科医師国家試験が実施されるようになり、歯科保存学(保存修復学)は重要な受験科目であり実習試験も課せられるようになった。

昭和22年、白土寿一が基礎細菌学教室主任として転室したことから、後任として三代目保存部長に山村総次が就任した。戦後の不安定なきざしは各方面に波及し、アメリカ占領下の日本には学制の大改革が行われ、日本大学専門部歯科から日本大学歯学部(旧制)への大学昇格に伴って、中川大介歯科長に代わって川合 渉が初代歯学部長に就任し、尾形利二が学監となった。

昭和26年頃には、山村総次、尾形利二らの指導の下、学会での発表などの学術的活躍はもちろんのこと、病院経営にも精力的に従事した。この頃、山村総次が歯科充填学の講義、中田頼重が充填学実習を担当し、浅野武男とともに教材の整理製作、基礎教育にと専心した。さらに、笛子信一は主に院内生を、稻東勝弥は医局長と診療室の責任者を兼務して主に外来患者の診療にあたり、川又俊夫、寺門正巳、阿部幸一らの協力を得て医局員の指導、診療および臨床実習にあたった。そして、従来の保存学は大学の歯科学科課程の名称確立に伴い、口腔治療学と保存歯科学とに分けられたことから、本学の保存部名も歯科大学におけるカリキュラムに合わせて口腔治療保存学教室と改称された。

昭和31年、本学大学院歯学研究科設置に伴う大学院第一期生の3名が入室した。同年7月には、山村総次が歯科病院副院長に就任した。そして、大学院校舎の落成に伴い、保存学教室も旧校舎(現2号館)の2階および4階に研究室を、さらに教室などを拡充、整備した。

昭和33年、保存学教室の臨床ならびに実習指導の強化を図るために、山村総次を中心に充填科主任に浅野武男、治療科主任に笛子信一とする体制がとられた。この年、バージニア大学のH. D. Coy教授が客員教授として来校し、保存歯科学についての講義と実習ならびにその教授法の指導がなされた。この際に持参されたエアタービン式切削器は、当保存学教室を通じて広く紹介され、やがて国産のエアタービンの出現の礎となった。

昭和35年、当教室の大学院第一期生の3名に歯学博士の学位が授与され、保存学教室の歴史に華を添える記

念すべきことであった。この年、浅野武男が教授に昇格した。さらに、歯科保存口腔治療学会(現在の日本歯科保存学会)の会長に尾形利二、幹事長に浅野武男が就任し、当番校として学会のために2年間取り組んだ。この頃、保存臨床にはD. Beach、教育にはH. D. Coy客員教授の指導を受け、浅野武男らによるアマルガム充填とその研究に発展させた。そして、保存部診療室にはエアータービン8基(国内と外国製品)が設置され、先進的な診療室が構築された。

昭和39年、新病院校舎(現在地)落成を機に、教室の教育指導体制も強化され、歯科保存学は山村総次と浅野武男で行うことになった。新病院校舎内の保存学教室に関しては、山村総次が大診療室、研究室、教授室および付属施設についての図面設計にあたった。翌年には、旧病院(現3号館)から移転し、新病院は最新の設備を誇るものとなり、保存学教室はその中にあって3階の大診療室に補綴学教室とともに臨床指導を行い、研究室と教授室はそれぞれ2階に配置された。これと同時期に保存部長の2交代制が協議決定され、昭和19年からの山村総次に代わって、四代目保存部長として浅野武男が就任し、新病院とともに保存学教室の運営にあたった。

昭和41年、保存学教室は大学制度の改革に伴って、保存修復学、歯内療法学、歯周療法学の三部門の講座制となり、それぞれの講座主任は浅野武男、尾形利二、楠正夫が担当し、山村総次は副院長に就任した。また、笛子信一は歯科衛生士学校校長に、稻東勝弥は歯科技工士学校校長にそれぞれ就任、兼務し、いずれも保存学教室内にあって講座外教授として臨床と研究に従事した。翌年には、日本歯科保存学会の当番校として浅野武男学会長と山村総次専務理事の下、一同、学会のために2年間取り組んだ。

大学紛争が全盛期の昭和43年頃には、その影響が歯学部にまで及び、学生教育もままならない日々を送るような状態であったが、医局員は結束してこれに対処した。昭和45年には、山村総次は歯科病院長に就任し、4年間にわたって臨床教育の指導にあたった。翌年、日本大学松戸歯科大学が開校となり、保存学教室からは、浅野武男、寺門正巳をはじめ、並木勇次、川上和夫、山崎宗与ほか若干の若手が松戸歯科大学保存学教室へ転任した。

昭和48年、小野瀬英雄が助教授に昇格し、トロント大学客員教授(予防歯科学教室)として2年間留学し、プラーカーを模した細菌集落直下の代謝物側分析などの研究に専心した。

昭和50年、歯科病院増築に伴って大診療室のユニットなどの整備、拡充が行われ、水平位診療を採用し、教育、診療の充実が図られた。昭和51および52年には、東京都歯科医師会主催の卒後研修が行われた。この昭和52年には、青島 健が教授に昇格し、小野瀬英雄が主任教

授へと昇格した。

・昭和54年以降の沿革

昭和54年、トロント大学のH. J. Sandham教授が客員教授として来校し、齲歯原生細菌とその齲歯発生能力について講義をした。この年、厚生省無歯科医地区歯科巡回診療団長として小野瀬英雄は沖縄県北大東島に出張した。

昭和55年には、トロント大学のR. C. Burgess教授、56年にはR. Ten Cate教授が客員教授として来校し、口腔組織学の最新の話題について講義をした。また、黒田隆専任講師がトロント大学客員教授として予防歯科学教室(R. C. Burgess教授)に2年間留学した。さらに、翌年には、升谷滋行助手がインディアナ大学歯科材料学(R. W. Phillips教授)、昭和60年には、田村豊彦助手が米国フォーサイスデンタルセンター(P. Grön教授)、翌61年には、日野浦 光助手がインディアナ大学歯科材料学のR. W. Phillips教授の下に、それぞれ2年間の留学をし研究に専心した。

昭和62年、第16回日本歯科医学会総会を日本大学歯学部が担当校として開催した。この年、UCSFのS. Silverman教授、NIOM所長のI. A. Mjör教授、アラバマ大学のK. Leinfelder教授が来校し講義した。翌年には、トロント大学のF. A. Sunahara教授、R. Ellen教授、D. C. Smith教授、ニュージャージー医科大学のJ. A. Stackhouse Jr教授が客員教授として来校し講義をした。

平成元年、小野瀬英雄は日本歯科保存学会の会長となり2年間その職に従事した。さらに、日大会館とアルカディア市ヶ谷において開催された第90回日本歯科保存学会春季学術大会の大会長として、この学術大会から初めてポスター発表形式を保存学会にとり入れ、より多くの研究発表がされるようになった。また、この年には、トロント大学のH. Limeback助教授、アラバマ大学のK. F. Leinfelder教授が客員教授として来校し講義をした。翌年には、インディアナ大学のB. K. Moore教授が象牙質接着について、ハーバード大学のI. L. Dogan教授がコンポジットレジンおよびグラスアイオノマーセメントについて講義をした。

平成4年、安藤 進専任講師がトロント大学客員教授として歯科材料学教室(D. C. Smith教授)へ2年間留学した。翌年の平成5年には、小野瀬英雄は副病院長に就任した。平成6年には、テキサス大学ヘルスサイエンスセンターのJ. O. Burgess教授がレジン添加型アイオノマーについて、3M社主任研究員のDr. S. Mitraがグラスアイオノマーについてそれぞれ来校し講義をした。この年、宮崎真至助手がインディアナ大学歯科材料学のB. K. Moore教授の下に2年間留学し研究に専心した。

平成 8 年、小野瀬英雄は厚生省無歯科医地区歯科巡回診療団長として沖縄県渡名喜島に出張した。この頃、小野瀬英雄を中心として新カリキュラムに沿った臨床実習の改善に取り組むとともに、翌年には東京都歯科医師会卒後研修を新規審美性修復材コンポーネントの基礎と臨床というテーマで実施した。さらに、平成 11 年から 3 年間、小野瀬英雄は病院長の職に就き、病院運営および臨床教育やテュートリアル学習の導入などに取り組んだ。さらに、病院長の職にあった平成 13 年には、病院名が日本大学歯科病院から日本大学歯学部付属歯科病院へと変更になった。平成 14 年には、学部次長に就任し、歯科衛生専門学校校長も兼務した。

平成 15 年、日本接着歯学会 2003 年シンポジウムを担当校として開催した。小野瀬英雄が定年退職後、主任教授が不在となったため、歯周病学講座の伊藤公一教授が兼任され、医局内の実務については技工専門学校校長であった黒田 隆があたった。その後、平成 17 年 11 月に宮崎真至が主任教授に昇格した。

平成 18 年、歯科医師臨床研修制度必修化やトライアルを実施していた共用試験歯学系 OSCE や CBT の正式実施があり、ほとんどの医局員がその実施にあたり協力した。

平成 20 年、第 21 回日本歯科医学会総会を日本大学歯学部が担当し、パシフィコ横浜において、“めざせ！健・口・美—未来に向けた歯科医療—”というテーマで開催した。宮崎真至は記念誌編集委員会の世話を人長としてその編纂に務めた。さらに、この年、東京都歯科医師会卒後研修を審美歯科に“必要な理論と実際—コンポジットレジンを用いたレイヤリングテクニックの実際—”というテーマで実施した。

平成 21 年には、坪田圭司助教、平成 24 年には、高見澤俊樹助教がクレイトン大学歯科材料学の M. A. Latta 教授の下にそれぞれ 1 年間の留学をし、接着試験方法の確立や歯質接着システムの接着疲労耐久性などの研究に専心した。クレイトン大学歯科材料学の M. A. Latta 教授は平成 24 年に客員教授として来校し講義をした。

平成 24 年、第 4 回日本メタルフリー臨床歯科学会学術大会を開催し、翌年の平成 25 年には、秋田県総合生活文化会館(アトリオン)において、第 139 回日本歯科保存学会秋季学術大会を“臨床をリードする歯科保存学の方向性を検証する”というテーマで宮崎真至大会長、安藤進準備委員長の下、医局員総出で開催した。その学術大会は特別講演 2 題、シンポジウム 3 題、ランチョンセミナー 4 題、認定研修会、口演発表 66 題、ポスター発表 151 題と盛況に行われた(第 1 図)。また、保存学会において特別講演を講演したインディアナ大学歯科材料学の J. A. Platt 准教授が来校し講義した。

平成 26 年 9 月に宮崎真至は病院長に就任し、日本大

学病院跡地に平成 32 年完成予定の新歯科病院への移行に向け、病院運営や臨床教育などの実務にあたっている。

現在、医局員は教育・研究・診療を行いながら、日本歯科保存学会、日本接着学会、日本歯科審美学会などの認定医、専門医や指導医の取得を目指して、日々研鑽している。また、講座としては、昭和 59 年から新島(常勤 1 名)、平成 10 年から式根島、平成 13 年から利島、平成 25 年からは青ヶ島の島嶼地域における診療にも協力している。さらに、平成 16 年から、日本大学歯学部保存学教室修復学講座同門会は保存学教室修復学講座に所属した者を対象に、相互の親睦、研修ならびに保存学教室修復学講座を支援することを目的として活動している。

・教育について

大正 10 年頃には、講義は歯科治術学と呼ばれ、その担当は佐藤運雄、川合 渉、横地秀雄および松田理一らであり、大正 14 年頃の歯科医師検定試験科目は治療学(齲歯および充填)となっていた。

昭和 26 年頃には、山村総次が歯科充填学の講義を担当し、中田頼重が浅野武男とともに充填学実習を担当した。

昭和 35 年には、昭和 15 年頃に改正された保存臨床実習症例種目によって充填関係に重点が置かれるようになり、その履修種目は面数単位制度が採用された。さらに、臨床実習内容も歯科医学の発展と時代の流れに対応し、年々その履修内容を改め、学生の臨床実習の成果をあげた。

昭和 39 年、新病院校舎(現在地)落成を機に、保存実習室には 210 台のマネキンとエアーバイン式切削器などが設置された。平成に入り、保存実習室(2 号館地下 2 階、第 4 実習室)は大きな改修が 2 度行われ、2 度目の平



第 1 図 “臨床をリードする歯科保存学の方向性を検証する”をテーマとした第 139 回日本歯科保存学会秋季学術大会を主催した。

成21年の改修ではマネキンおよび実習設備はもちろんのこと、すべての実習机に個別のモニターが設置され、実習についての説明やデモンストレーションは、すべての学生が同じ条件で受けられる環境が整備された。

平成5年には、歯学部学則が変更され、学校教育法の改正と大学設置基準の改正に伴う新カリキュラム導入、また、部則も変更されたことにより、課題別科目の新設、授業科目の設定、50分の授業形態、単位制度、授業期間の変更などが行われ、保存修復学としてもその変更に対応した教育内容とした。さらに、同年からシラバスとして授業計画が刊行された。その平成5年には、4年生に対して、前期に13回の保存修復学・同実習として総論と硬組織疾患、修復法の種類、前準備、窩洞などについての講義および窩洞形成の実習、後期には13回の保存修復学・同実習としてセメント、審美性修復材料であるコンポジットレジン、グラスアイオノマーセメントや金箔、アマルガムについての講義および実習を行った。5年生に対しては、前期に13回の保存修復学・同実習としてメタルインレーについての講義および実習、6年生に対しては、14回の保存修復学として齲歯学の講義を行った。さらに、5年生の後期から6年生の前期にかけての臨床実習では、一般症例としてメタルインレー5症例、アマルガム1症例、コンポジットレジン6症例、試験症例としてメタルインレー1症例、コンポジットレジン1症例が課せられ、必修点数50点、自由点数1850点以上という内容であった。

平成8年から平成9年にかけて、新カリキュラムに沿った改革と移行が行われ、平成9年には、4年生の前期からであった保存修復学の講義が3年生の前期へ移行し、3年生の後期および4年生の前期で保存修復学の講義および保存修復学実習となった。5年生は前期に歯科病態系演習、後期は臨床歯科学演習および臨床実習、6年生は前後期で臨床講義やケースプレゼンテーションを行った。その後、従来の学科(講座)別から領域別・疾患別に再編成され、平成13年には、3年生への授業科目名がう蝕治療の基礎I、IIおよびう蝕治療の実際I、II、平成14年には、メタルインレーによるう蝕治療およびメタルインレーによるう蝕治療の実際や成形修復材によるう蝕治療および成形修復材によるう蝕治療の実際に変更された。

現在、歯科保存学第I講座では、授業科目は口腔科学の歯冠修復学(単位数10)として3年生への講義、実習が中心で、前期に保存修復学I(講義)、保存修復学実習I(実習)、後期には保存修復学II(講義)、保存修復学実習II(実習)、クリニカルカリオロジー(講義)を担当している。基礎実習は、それまで基礎系の講義や実習のみを受けてきた学生にとって初めての臨床系の実習であるため、学生2~3名に対して教員1名としたマンツーマン

に近い体制で、厳しい中にも学生1人1人に合わせた丁寧かつきめ細かな指導を行っている(第2図)。5年生には院内での臨床実習で、見学・介助実習、相互実習の課題として隔壁法の実施、さらには、必修症例と試験症例として2症例の光重合型コンポジットレジン修復の自験を実施させ、その試験症例に対してのプロトコールの作成と口頭試問を行うことによって、保存治療に必要な知識および技能の習得を目指している。6年生にはアドバンスト歯科学演習および総合歯科学演習を行っている。また、卒後の臨床研修医へは、光重合型コンポジットレジンを中心とした審美性修復など、より専門的な講義や臨床研修指導を行っており、歯学部の教育目的である「日本大学の目的及び使命に則り、歯学の理論及びその応用を教授し、併せて人格を陶冶して有為な歯科医師を養成する」という教育目的を時代に即して達成するために、幅広い教養と総合的な判断力および基本的な問題解決能力の修得を目指し、医局員一同で教育にあたっている。

・研究について

保存部における研究活動は昭和2年頃から始まり、昭和4年以降、日本大学歯科保存研究会が発足すると長年



第2図 基礎実習においては、実習室の特性を生かしてビデオを用いたデモンストレーションを取り入れ、臨床における実際をより理解しやすいような工夫がなされている。

にわたり毎月例会が行われ、昭和18年頃の太平洋戦争の戦時下にあっても保存研究会は連綿として活動が活発に行われた。

昭和40年代には、小野瀬英雄の下、プラーカーを模した細菌集落直下の代謝物側分析など、齲歯症の細菌学的研究や歯髄感染症に関する一連の研究が行われ、その傍ら、変色歯の漂白(ウォーキングブリーチ)やクロルヘキシジンジグルコネート(洗口剤、消毒剤)の紹介なども行っていたが、予防領域のテーマは臨床家にとっては全く関心のない時代であった。

昭和50年代前半になると、カルボキシレートセメント、アマルガム、金箔、グラスアイオノマーセメントや化学重合型コンポジットレジンなどの歯科材料やその歯科材料に対する細菌の影響などの臨床理工学的研究が主に行われた。

昭和50年代後半から60年代は、根面齲歯や歯頸部象牙質知覚過敏について、さらに、光重合型コンポジットレジンや可視光線照射器などについての研究を行い、光重合型コンポジットレジンの重合特性と照射器との関連について検討した結果、これら歯科材料の臨床医の知識、取扱い方によって、その予後には大きな影響があり、これをR. W. Phillips教授に相談しテクニックセンシティブと名付けて研究を継続した。

平成に入ると、コンポジットレジンインレー、光硬化型グラスアイオノマーセメント、レジンセメントなどの研究が加わり、小野瀬英雄の研究業績は、著書38編、学位論文146編、総説・その他143編、シンポジウム・学会発表498編であり、最終学位受領者は合計146名となつた。

現在、宮崎真至の下、主な研究内容は、光重合型コンポジットレジンの歯質接着性について、接着試験方法の確立から臨床使用で想定されるテクニックセンシティブ因子の影響などの多角的な検討、コンポジットレジンと金属やセラミックスなどの被着体に対する補修修復の検討、コンポジットレジンの重合収縮や重合挙動などの諸物性、表面自由エネルギーの測定による界面科学的な検討、超音波測定法を応用したセメントの弾性率や硬化挙動、光干渉断層装置(OCT)を用いた歯質の状態の観察など、また、臨床に関連した研究では、審美性修復材料の短期あるいは長期の経過観察を追ながら、臨床評価を行っている。その内容は多岐にわたり、そして精力的に研究を行っている。さらに、学会発表については、海外学会ではIADR(International Association for Dental Research)、AADR(American Association for Dental Research)、IAD(International Congress on Adhesive Dentistry)など、国内学会では日本歯科保存学会、日本大学歯学会、日本接着学会、日本歯科審美学会、日本歯科理工学会などで研究発表を行い、学術論文については、

英文ではJournal of Oral Science, Operative Dentistry, Journal of Dentistry, Dental Materials Journal, Dental Materials, European Journal of Oral Sciencesなど、和文では日本歯科保存学雑誌や接着歯学などを中心に投稿し、多くの学会や学術雑誌において研究成果を報告し、保存修復学分野の発展に寄与している。

近年の年間の研究実績は、学術論文は英文および和文で15～17編、学会発表は35～40題、著書・総説・その他は20～25編、国内外でのシンポジウムや講演は約60回となっている。さらに、学位受領者は宮崎真至が主任教授に就任してから、平成27年現在で50名(平成22年から導入された社会人大学院も含む)となっている。

・その他(人事関係)

現在の構成は、宮崎真至教授以下、瀧川智義、升谷滋行准教授、助教6名、専修医8名、研究生5名、大学院生14名の36名であり、これに加えて、社会人大学院生4名、兼任講師28名および非常勤医員30名である(第3図)。この構成で教育・研究・診療の3本柱を中心に、さらに、研修医指導、新島(常勤1名)、式根島、利島および青ヶ島の島嶼地域における診療にもあたっている。



第3図 現在の歯科保存学第I講座員の集合写真。撮影当日に参加できなかった講座員に加え、社会人大学院生、兼任講師および非常勤医員によって運営されている。

歯科保存学第Ⅱ講座(保存学教室歯内療法学講座)

・昭和 53 年までの沿革

大正 10 年、日本大学専門部歯科として誕生した本学は、昭和 22 年に日本大学歯学部となった。当時の保存学教室は口腔治療学と充填学の 2 講座および病院内歯槽膿漏科から構成されており、その教室は大部屋で各講座が混在しており、構成人数も今日の 1 謲座程度の人数であった。昭和 43 年に口腔治療学が歯内療法学講座に、充填学が保存修復学講座にそれぞれ改名するとともに新たに歯周病学講座が独立して保存学教室 3 謲座制となり現在に至っている。歯内療法学講座の初代教授はオゾン療法で有名な尾形利二教授が主宰され、さらに教室には 笹子信一助教授(後に教授、歯科衛生専門学校校長)、稻東勝弥助教授(後に教授、歯科技工専門学校校長)、並木勇次講師(後に松戸歯学部教授、保存修復学)が在籍され、昭和 45 年に尾形教授が定年退職され、3 年間の教授空席の後、昭和 48 年に斎藤毅教授が歯内療法学講座主任教授に就任された(第 1 図)。



第 1 図 昭和 54 年 歯科保存学題Ⅱ講座



第 2 図 平成 12 年 歯科保存学題Ⅱ講座

・昭和 54 年以降の沿革

昭和 48 年から教授職を務めていた斎藤毅教授が平成 12 年に退職され(第 2 図)、同年目澤修二教授が就任されたが同年にご逝去。その後、明石俊和講師を経て平成 14 年から当時歯周病学講座主任教授であった伊藤公一教授の指導下で小木曾文内助教授を中心に医局が運営され、7 年間の教授空席の後、平成 19 年に小木曾文内教授が歯内療法学講座(歯科保存学第Ⅱ講座)主任教授に就任され現在に至っている。平成 25 年に鶴町保准教授が教授に昇格(現歯科衛生専門学校校長)。現在(平成 27 年 2 月 28 日現在)教授 2 名、准教授 2 名、助教 4 名、専修医 6 名、医局員 8 名、大学院生 9 名、計 31 名の講座員となっている(第 3 図)。

・教育について

学生教育においては、平成 7 年までは、4 年次で歯内療法学講義を、5 年次では歯内療法学実習(前期のみ)を行っていた。平成 8 年になり学生教育カリキュラムの変更により、4 年次で歯内療法学講義・歯内療法学実習(1 年間)を行うようになった。これらは学科別の科目講義であったが、現在は学生教育カリキュラム変更により、小児歯科学、歯周病学および基礎系講座と連携しながらの領域・疾患別に講義と実習を行っている。このことにより、特定の学科に限定されない総合的な学習が効率的に行われ、学生の知識の融合を図っている。

講座員教育においては、従来から定期的に抄読会、症例発表を行っている。

講座員をグループ編成し、それぞれのグループで症例提示によるカンファレンスを実施し、若手講座員の育成や症例解決への糸口を見つけるなどの討論を行い、日々の研鑽を積んでいる。

また専門学会(日本歯科保存学会など)の専門医・認定医の資格取得を推奨しており、これまでに OB を含めた多くの講座員が専門医・認定医を取得している。なお、当講座は現在、日本歯科保存学会認定医研修施設、日本歯内療法学会認定医研修施設として指定されている。



第 3 図 平成 26 年 歯科保存学題Ⅱ講座

・研究について

専任教員、大学院生、研究生など大勢の講座員が行う研究分野は、基礎的研究から臨床に渡り、その研究範囲は広い。斎藤毅教授は、「研究者は単なる物知りではなく、未知の世界を開拓する開拓者である。」と語り、「大学人としては独創的な研究を発展させることが要求される。」と述べている。

斎藤毅教授就任当初の日本の歯科医学は、戦争による大きな空白の時代により、アメリカの歯科医学に水をあけられていた。そこで、American Association of Endodontists(AAE)専門医を日本大学客員教授として招聘、歯内療法の専門的な新しい流れを積極的に引き入れてきた。斎藤毅教授は歯内療法のメカトロニクス(機械工学と電子工学を合わせた和製英語)を得意とし、相対値法を応用して開発した根管長測定器を歯科界に提供した。これは物理学教室山岡大准教授との共同研究であり、それまでの単一インピーダンス測定法とは異なり、湿潤根管でも根管長が測定可能な新しい方法であったことから世界各国の歯内治療専門医にも注目される画期的な研究であった。その他に根管治療の機械化やレーザー治療、根尖病巣の免疫応答、歯内療法における薬物治療や歯の動搖度測定など多くの研究を行ってきた。

小木曾文内教授は、従来からの研究を踏襲すると共に新たな研究テーマを掲げ研究を行っている。現在の講座の研究としては、新素材の歯内療法用セメントに関する研究、根尖性歯周炎の生物学的メカニズムに関する研究、慢性疼痛に関する生理学的研究、新しい診査・診断機器に関する基礎的研究、新たな根管清掃・消毒法に関する研究および低出力レーザー治療の骨再生に及ぼす影響など歯内療法学領域において多岐に渡る研究を行っている。そのため、治療に直接的に貢献可能な臨床的研究と関連疾患に関する基礎的研究の両面から行うことにより、基礎領域と臨床領域を融合させた総合的な研究の推進を目指している。

・その他(人事関係)

昭和43年に口腔治療学が歯内療法学講座に改名したが、現在は歯科保存学第Ⅱ講座と名称が変更されている。

初代教授は、尾形利二教授が就任され、昭和48年から二代目教授として斎藤毅教授が就任された。斎藤毅教授は27年間と長期に渡り教授を務められた。その他学内外での活動功績が認められ、平成17年に日本大学名誉教授にそして平成26年に瑞宝中綬章を受章された。平成12年に三代目教授として目澤修二教授が就任されたが、同年にご逝去。現在平成19年に四代目教授として小木曾文内教授が就任され、現在に至っている。

歯科理工学講座

・昭和53年までの沿革

歯科理工学講座は、日本大学歯学部の前身であった東洋歯科医学専門学校が設立された大正9年4月当初から、歯科材料学の講座があり、羽生長一郎が担当した。羽生は歯科材料の研究に関与したが、教育に主力を注ぎ、日本大学歯科医学校が併設(大正15年)されると、教務主任の要職に就任し、その後、第3代校長を務めた。昭和16年、国際情勢が次第に悪化し、ついに戦争に突入することになったが、この戦争を契機に歯科材料の国产化および金代用合金の研究が真剣に考えられるようになった。本学専門部歯科を卒業したての永井一夫など新進気鋭の研究者が続々と入室し、設備や資材の不足などにめげず、様々な材料に関する基礎的研究に情熱を傾けた。しかし、戦況は日々悪化し、研究用資材もままならぬ状態となり、昭和20年にはついに敗戦を迎えることになった。戦後、新制大学歯学部が昭和27年4月に発足し、早川堅太郎、永井一夫が歯科理工学講座の教授として再出発した。早川のもとでは、合金の電子顕微鏡観察、各種ホルモンの物理化学的性質の探求およびビタミンとの関係に関する研究などが行われ、永井のもとでは、異種金属間の電位差測定による金属材料の腐食に関する研究および当時歯科界の話題の中心であったレジンの臨床応用に関する検討などが盛んに行われた。その後、歯科理工学を勉強しようとする研究員も徐々に増えたが、歯科材料の研究で医学博士の学位を得ることが困難であった。しかし、二人の教授の努力により、あるものは慶應大学医学部より、あるものは日本大学医学部より、医学博士の学位を授与されるようになった。昭和31年、私立歯科大学としてわが国最初の大学院設置が許可され、大学院校舎が完成し、当講座は4階の新しい研究室へ移転した。大学院設置によって、歯科理工学の研究で学位が取得できるようになり、大学院生や研究員として講座への入室希望者が多くなり、昭和35年には、大学院修了の歯学博士第1号が誕生した。その栄誉を担ったのは、元FDI会長、元東京都歯科医師会会长の鶴巻克雄であった。また、論文提出による歯学博士第1号は大橋正敬であった。昭和33年茂木正寿は、講座から最初にドイツ(ケルン大学)へ留学し、その後、大橋正敬(昭和37年、米国国立標準局歯科材料研究所)、土生博義(昭和39年、米国アラバマ大学歯学部)、仁平真佐秀(昭和43年、米国アラバマ大学歯学部)など講座員の長期海外留学生が続いた。昭和40年、早川堅太郎の定年退職の後任として、東京医科歯科大学から、東 節男教授が着任した。東は、印象材やセメントをはじめ数多くの発明を成し遂

げ、発明協会などから数度にわたって表彰を受けており、昭和42年には東京都科学技術功労者として表彰され、さらに昭和43年には紫綬褒章の栄誉に輝き、個人だけではなく、講座の名声を一段と高めた。講座から他の大学などに栄転した者は、昭和41年に亀田 務が岩手医科大学歯学部へ、昭和46年に堀江港三と根本君也が新しく設立された日本大学松戸歯学部へ、昭和48年に土生博義が新設された日本大学歯学部総合歯学研究所へ就任した。

・昭和54年以降の沿革

昭和55年4月、大橋正敬が東 節男教授の後の歯科理工学講座を引き継いで教授に就任した。専任講師は安斎 磬、西山 實、助手は竹井満久、廣瀬英晴、歯学部助手は杉井勝彦、西原 滋、副手は菊地久二、吉橋和江、大学院生は今村貴彦、追立正和、小川利男、小野元弘、片山幸太郎、齋藤 薫、菅原明喜、高見沢 信、松平修一が在籍した。兼任講師は、大学院修了者が多く、赤司幸勇、栗沢 清、江藤世助、大城 泰、小山田勝彦、小滝友一、木幡 篤、桜井英満、竹下朝也、中川吉章、西島国明、仁平真佐秀、長谷川 清、平田修二、増田勝之、善積秀行が在籍した。大橋正敬は、故永井一夫教授の下で歯科理工学の研鑽を積み、昭和33年6月日本大学専任講師、昭和37年2月～昭和40年6月まで米国国立標準局歯科材料研究部門へ留学、昭和40年12月に日本大学助教授、昭和43年5月にIADR-DMG日本代表、昭和55年4月に日本歯科医師会器材規格部会委員長、平成元年4月日本工業標準調査会歯科材料専門委員会委員長、平成2年10月米国歯科医師会名誉会員、平成3年4月IADR-DMG会長などの要職に就任し、教授となってからは、教育・研究に一層尽力した。また、講座員には先輩から培われた「独創性を持て」の伝統の上に、世界を見渡す国際性を持つように指導し、国際学会での研究発表を活発にし、多くの研究者から注目される業績を残し、講座の国際的な位置を高めた。また、大橋の留学先であった、米国国立標準技術研究所に飯塚秀人、菊地久二、菅原明喜、深瀬康公を留学させ国際性を高めると共に広い視野で研究することを指導した。学会においては、日本歯科材料器械学会と歯科理工学会との統合に尽力し、日本歯科理工学会の設立に際して多大の貢献をした。また、国際的には、IADRの中でも規模の大きいDMGの会長に就任し、米国歯科医師会名誉会員となった。国内では、ピエールフォーシャールアカデミー日本代表国際理事、日本歯科産業学会会長に任じられた。

平成2年4月、助教授であった西山 實が大橋正敬教授の定年退職後の歯科理工学講座を引き継いで教授に就任した。専任講師は安斎 磬、助手は掛谷昌宏、菊地久二、菅原明喜、廣瀬英晴で、副手に吉橋和江、大学院生は齋

藤仁弘が在籍した。兼任講師は、赤司幸勇、栗沢 清、飯島清人、飯塚秀人、今村貴彦、臼井 潔、江藤世助、小山田勝彦、加藤保雄、小滝友一、木幡 篤、後藤尚久、高見沢 信、竹井満久、鳥山史人、中川吉章、中村均志、仁平真佐秀、長谷川 清、平田修二、保谷 賢、増田勝之、松平修一、善積秀行が在籍した。西山 實は、昭和41年3月に日本大学歯学部を卒業、昭和41年4月に助手、昭和47年4月に専任講師、昭和56年4月に助教授となり、講座の伝統の上に、歯科理工学は歯科生体材料学、歯科医用工学および歯科臨床生体医用工学の三つの柱からなるとの理念で、臨床系講座との共同研究に励み、絶えず臨床を意識した特色ある歯科理工学講座を確立した。この間、研究および学生の教育研究指導にあたるとともに歯学部内における各種委員会委員として歯学部の教育、研究活動の発展に努め、平成5年4月から平成11年3月まで日本大学歯学部学生担当および日本大学歯学部学生生活委員会委員長として歯学部学生のクラブ活動や学生行事である球技大会や学園祭の開催に情熱を注ぎ尽力した。平成13年4月より平成18年3月まで日本大学軽井沢研修所所長として日本大学の学生や教職員の福利厚生施設の充実に力を注ぎ、多くの課外活動や研修の充実を行った。著書は、最新歯科材料学、スタンダード歯科理工学、ハンディー歯科理工学など12編、原著論文280編、さらに平成13年1月から平成13年12月まで国際歯科研究学会歯科材料分科会日本部会会長、平成14年4月より平成16年3月まで日本歯科理工学会会長に就任し、歯科生体材料、歯科材料・器械の発展に大いに貢献した。

平成4年4月、助手であった廣瀬英晴は、専任講師となり、平成6年4月助教授に昇格した。平成14年11月、安斎 磬は、専任講師から教授に就任し、平成15年2月に退職した。安斎 磬は、歯科用セメントの研究、シクロホスファゼンモノマーの合成と歯科用レジンへの応用についての研究など数多くの業績を残している。また、学生教育では、独特の語り口調で学生の興味を引いた授業を行った。平成16年4月、日本大学歯学部総合歯学研究所材料研究室から平口久子助手が歯科理工学講座に



第1図 平成6年 歯科理工学講座

移籍となつた。

昭和 41 年より平成 6 年まで、講座には毎年、東海大学工学部の 4 年生が卒業研究のために在籍しており、1 年間の歯科材料の研究により卒業論文を作成していた。昭和 42 年の卒業研究生鈴木一臣は、日本大学松戸歯学部に勤務し、その後岡山大学歯学部の教授に、昭和 45 年の卒業研究生福島忠男は、福岡大学歯学部の教授に就任している。助教の掛谷昌宏も、昭和 55 年の卒業研究生である。昭和 61 年の卒業研究生石川陽一は、歯学部助手として平成 15 年まで勤務した。また、卒業生の中には歯科材料メーカー関係の会社に就職する者もいた。

また、平成 5 年 4 月、海外からの留学生として、中国国籍の沈 凌が聴講生を経て歯学部助手として勤務し、学生実習を行うと共に歯科チタン铸造関係の研究を行つた。平成 11 年 6 月北京で開催された日中口腔医学大会等、学会で研究発表し、平成 14 年に学位を取得した。平成 10 年 9 月、聴講生として台湾国籍の許 学全(現在、台湾中台科技大学教授)が、1 年間在籍し、菊地久二と共に歯科铸造用チタン関係の研究を行い、帰国後も毎年、日本で行われる日本歯科理工学会に参加して研究発表を行つてゐる。

平成 19 年 4 月、学校教育法の一部改正が行われ、助教授であった廣瀬英晴は准教授に、講師専任扱であった菊地久二は専任講師に、助手であった掛谷昌宏、平口久子は助教、副手であった吉橋和江は技手となつた。

平成 19 年 4 月、東京医科歯科大学から米山隆之が西山 實教授の後任として歯科理工学講座の教授に就任した。准教授は廣瀬英晴、専任講師は菊地久二、深瀬康公、助教は掛谷昌宏、平口久子で、技手は吉橋和江が在籍した。兼任講師は、赤司幸勇、飯島清人、今村貴彦、大木裕玄、小野内 真、小嶋太巳、木幡 篤、齋藤仁弘、榎原茂弘、笹尾道昭、菅原明喜、杉井勝彦、竹井満久、中川吉章、中島義雄、中野俊明、中村均志、播磨利彦、平田修二、松平修一、宮崎紀代美、八木原建司、由井眞司が在籍した。

昭和 54 年から現在までに、大橋正敬教授、西山 實教授、安斎 磬教授、米山隆之教授らが指導した助手、大学院、研究員で学位を取得した人数は 100 名を超えてゐる。昭和 53 年までの学位取得者は 207 名であり、歯科理工学講座開設から現在までに 300 名を超える博士が誕生しており、歯科医学の発展に大きく貢献している。米山隆之は、平成 26 年 4 月より一般社団法人日本歯科理工学会理事長を務めている。

・教育について

歯科理工学講座では、平成 4 年までは、第 3 学年の前期と後期で、歯科理工学の講義と実習を行つてゐた。平成 5 年からは、現在と同様に、第 2 学年後期の講義で、

歯科材料、器械・器具に関する基本的な知識と理論を理解し、実習でこれらの特性や使用方法を習得できるように教育している。また、第 3 学年では前期に講義と実習を実施し、歯冠修復領域で使用する歯科材料、器械・器具に関する理論を理解するとともに、これらの特性や使用方法を習得できるように教育している。実習には、専任教員の他、兼任講師として 23 名の歯学博士が参加している。

大学院の歯科理工学では、歯科医療の中で使用する様々な歯科材料、器械・器具について、その性質や構造、性能などを物理学、化学、生物学および生体安全性の立場から研究することを目指している。そのため、歯科材料および生体材料に求められる特性を理解するとともに、これらの解明に当たつて基本となる材料の機械的性質、熱的性質、ならびに組成分析や表面性状などに関する試験法の理論と実際について教育している。また、日本大学歯学部附属歯科技工専門学校の歯科理工学の教育も担当している。

・研究について

大橋正敬は、歯学史の研究を主に行い、内国勧業博覧会の歯科器材出品物を中心に、明治、大正時代の歯科用器械・器具の変遷を明らかにした。兼任講師の長谷川清は、電気的根管長測定器を開発し、その後、大学院生らにより多くの関連研究が行われた。講座内では、西山 實を中心とするグループが流し込みレジンの改良、歯科材料の熱的性質の検討、歯冠用硬質レジンの改良などを行つた。安斎 磬を中心とするグループでは、リン酸亜鉛セメントの改良、ポリエスチル樹脂系模型材の開発、フォスファゼン系モノマーを用いた歯科用レジンの開発と応用などの研究を行つた。

西山 實は、低温加硫型ビニルシリコーンゴムが無味無臭で成型容易な材料であり、きわめて良好な弾性を示すことから臨床での応用を企図し、義歯の適合性の改善、口腔外科領域への応用、さらに矯正用材料としても使用できることを証明した。また、シリコーンゴムが義歯と強固に接着するための加硫方法を提示するとともに接着機序の解明を行つた。このシリコーンゴムは長期間の水中浸漬によつても安定した物性を示すことが証明された。これらの成果は、適合性の悪くなつた義歯の裏装に役立ち、義歯の使用年数を長くするなど、今後の高齢化社会に貢献をもたらすものと期待されている。印象材は、歯や口腔粘膜および歯列の形態を立体的に写し取るため、歯の小さな凹みや溝を正確に再現する必要がある。そこで、印象材の細部再現性を評価するための方法として、ISO 1563 には、20 ~ 75 μm の幅で断面角が 90° の細線を金属板に均等に刻み付けた細線再現性金型を使用し、正確に細線が写し取れるかどうかを試験する細線再

現性試験がある。しかし、細線再現性金型を作るに際し、細線を均等に刻み付けることは大変な作業で、同一の金型を大量に生産することが難しかった。そこで、細線再現性金型を電鋳によって作製することを提示した。この成果により、多くの研究者が同時に細線再現性測定用金型を使用することができるようになり、実験成績の比較検討が客観的に行えるようになった。技工作業中に排出するガス、すなわち、鋳造工程でのインレーワックスの焼却時および鋳造用埋没材の加熱時に発生する有毒なガスは、技工作業環境を大幅に悪化させる。しかし、従来は、触媒による排ガス装置がなかった。そこで、有毒なガスを触媒によって除去する排ガス装置を提示した。この研究成果によって技工作業環境が改善された。これらの研究、開発は、歯科理工学とともに歯科技工学の発展にも貢献した。

米山隆之は、チタン合金の歯科応用に関する研究を進めており、歯科鋳造用チタン合金(Ti-6 Al-7 Nb 合金)や超弾性矯正用ワイヤーの開発、セラミックスおよび高分子材料の接合と複合化など、補綴学領域や矯正学領域での共同研究を進めている。その他、講座内では、テーマごとに編成したグループでチタン合金の鋳造とレーザー溶接、歯科材料の力学的性質評価法、骨補填材の開発と応用、歯科精密鋳造における合金の鋳造収縮の補償、印象の消毒が模型の再現性に及ぼす影響などの研究を行っている。

・その他(人事関係)

現在の歯科理工学講座は、米山隆之教授、廣瀬英晴准教授、菊地久二専任講師、深瀬康公専任講師、掛谷昌宏助教、平口久子助教の6名の専任教員と2名の大学院生である岩崎優希子、岩崎英理子、兼任講師の赤司幸勇、新井浩一、飯島清人、大木裕玄、小山田勝彦、小嶋太巳、小滝友一、齋藤仁弘、榎原茂弘、笹尾道昭、杉井勝彦、竹井満久、中川吉章、中島義雄、中村均志、播磨利彦、平田修二、松平修一、三野元崇、宮崎紀代美、宮永光一、八木原建司、由井真司で構成されている。



第2図 平成 26 年 歯科理工学講座

解剖学第 I 講座

・昭和 53 年までの沿革

解剖学講座が2講座制になったのは、昭和46年に北川 正が教授を拝命した時で、それまで、すべての講座員がマクロ・ミクロの区別なく教育・研究活動に従事していた。初めに2講座制になるまでの解剖学講座の歴史について簡単に振り返りたい。なお、東洋歯科医学校創設時から昭和22年までの詳しい沿革については日本大学歯学部60年史および日本解剖学会100周年記念誌の記述に委ねたい。そもそも解剖学教室が正式な講座として開設されたのは昭和22年6月18日、日本大学歯学部の設置が認可された時で、慶應義塾大学医学部助教授の加藤信一がはじめての専任教師(解剖学担当)として本学へ着任した。翌昭和23年3月、同じく慶應義塾大学医学部助教授であった三井但夫が教授を拝命したことで、解剖学講座は2人の教授によって運営されることになった。なお、三井は昭和32年9月から米国・ワシントン大学に1年6ヶ月留学し、帰国後昭和34年9月に本学を辞し、慶應義塾大学に移った。加藤・三井両教授は在職中多くの業績をあげ、本学解剖学講座の開設者として永きにわたりその名を残す事になる。

昭和29年8月、尾崎 公が助手に命ぜられている。尾崎は主に口腔解剖学を専攻し、昭和30年4月から35年3月まで東京大学医学部解剖学教室の藤田恒太郎教授のもとへ国内留学しており、その間、昭和34年に専任教員に任命され、昭和37年4月、助教授に昇格、昭和43年に教授を拝命した。昭和34年4月、磯川宗七が専任教員に任命された。磯川は、はじめ本学病理学講座に籍を置いていたが、昭和30年3月から東京大学医学部助手として前述の藤田恒太郎のもとで教育・研究に従事していた。磯川は帰学後解剖学講座に移り、口腔組織学を担当し、昭和36年7月、米国・インディアナ大学歯学部へ留学、昭和38年に帰国後、助教授に昇格し、昭和43年4月に教授を拝命した。ここに解剖学講座において尾崎・磯川ともに日本大学歯学部卒業生として初の教授が誕生することになる。尾崎は昭和43年10月からオーストラリア・アデレード大学に約2年間留学後、昭和46年3月に加藤とともに松戸歯学部へ転任した。加藤と尾崎の転出により、解剖学講座の教授は磯川ただ一人になったが、昭和46年7月、北川 正(第1回左)が日本大学医学部から歯学部勤務を命ぜられ、赴任後、たちに教授に昇格し、肉眼解剖学の講義と実習を担当した。このとき、初めて解剖学講座は大講座制から2講座制となり、第I講座は北川が、第II講座を磯川がそれぞれ主宰することになり、現在の教育・研究の基礎をつく

ることになった。

・昭和 54 以降の沿革

北川は、昭和 62 年 4 月から平成 15 年 1 月まで、当時我が国最大の篤志献体団体であった白菊会の理事長を務めた。北川は自らも会員の一人として献体登録とともに、当時の会長である倉谷利一氏と二人三脚で会の運営に多くの力を注いだ。任期中、北川の清廉な人柄と情熱をもって同会における献体登録者数を着実に増加させた。その他、北川は篤志解剖全国連合会常任幹事、財団法人日本篤志献体協会常務理事といった要職も兼務し、医学・歯学における「献体」の重要性を広く社会に知らしめ、その普及に邁進した。また、学内においては昭和 55 年度から 12 年間、学務担当を務め、歯学部における教育改革と教育環境の改善に尽力した。特に、現在の 2 号館地下 3 階にある解剖学実習室に大掛かりな換気システムを導入したのも北川である。当時は画期的なシステムの導入であり、現在もなお実習中のホルムアルデヒド濃度の低減につながっている。学務担当解職後は学部次長を務め、本学発展のため大いに貢献した。

平成 5 年 3 月北川 正が定年退職に向かえ、後任に第Ⅱ講座助教授の高城 稔(第 1 図右)が同年 5 月 1 日付けで教授を拝命し、第Ⅰ講座を主宰した。なお、北川は、日本大学総合科学研究所教授として平成 10 年 3 月まで勤務した後、日本大学名誉教授の称号を賜り、平成 22 年には春の叙勲において瑞宝中綬章を受章している。高城は赴任するとすぐに解剖学教育の改革にあたるとともに、講座員および大学院生の研究指導を行ない、後進の育成を精力的に進めた。特に、解剖学実習においては独自の実習書を編纂し、学生にとって複雑な解剖学実習を系統立てて理解できる方針を打ち立てた。また、研究面においては肉眼解剖学的な研究手法に拘らず、光学・電子顕微鏡を使用した研究あるいは当時の流行であった分子生物学的手法を随所に取り入れ精力的に研究を進め、多くの業績をあげた。

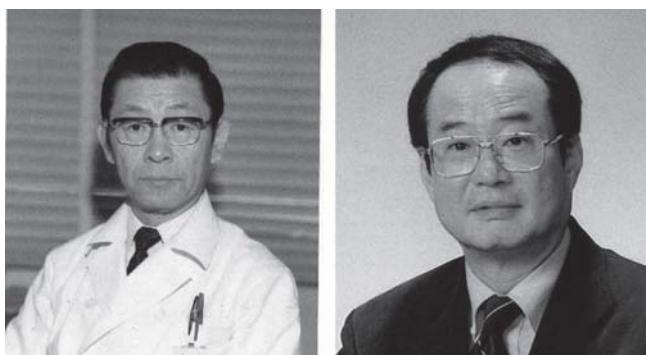
高城は学外の委員会活動も積極的に行っている。教授在職時、厚生労働省歯科医師国家試験委員、東京都歯科技工士国家試験委員を歴任するとともに文部科学省大学設置・学校法人審議会専門委員会委員にも任命され、誠実かつ公正にその職務を務めた。また、歯科基礎医学会理事、日本解剖学会評議員、解剖体協議会理事、白菊会連合会運営委員にという要職にも就いていた。学内においては、研究委員会副委員長、平成 14 年 4 月から平成 18 年 3 月までは図書館長を務め、図書館改革に躍進した。現在の図書館ホームページや蔵書検索システムの改善については高城がその礎を築いたと言っても過言ではない。さらに、学外では The Journal of Histochemistry and Cytochemistry と Dentistry in Japan の編集委員、

学内では Journal of Oral Science の編集委員長も務め、英文学術誌の編纂にも力を注いだ。なお、高城は平成 23 年 3 月に定年退職を迎える、その後は日本大学歯学部特任教授として本学に在籍している。

平成 23 年 4 月、第Ⅰ講座准教授の高橋富久が教授を拝命した。高橋は高城のスタッフと研究内容をすべて引き継ぎ、講座発展のために進取果敢に教室運営を行っている。特に研究面においては、細胞分化を解明するため、細胞内シグナル分子の分子間相互作用に重点を置き、生化学的な手法を駆使し研究を推進している。また、学外では平成 23 年から歯科基礎医学会および日本解剖学会の評議員を務めるとともに、解剖体協議会理事、篤志解剖全国連合会評議員、白菊会連合会運営委員として献体活動関連委員会にも精力的に参加している。学内では平成 23 年 4 月から現在まで遺伝子組換え実験安全委員会委員長を、また平成 26 年 4 月から企画広報委員会副委員長を半年間務め、その後、同年 9 月からは学生生活委員会副委員長に任命されている。平成 32 年には歯学部の創設 100 周年記念事業の一貫として新校舎が完成する。新たな解剖学実習室は第Ⅰ期工事に含まれ平成 29 年の秋に完成予定であり、新実習室において実施される新たな時代の解剖学教育に期待するところである。

・教育について

解剖学講座が 2 講座制になって以来、第Ⅰ講座が肉眼解剖学(系統解剖学)の講義と解剖学実習を担当している。しかし、北川が着任した当時は献体思想が広く世間一般には浸透していなかったため、実習で使用する解剖体数が極端に不足し、「解剖学教育の危機」とまで言われた時代であった。これは本学に限ったことではなく、我が国の医学系・歯学系大学がそのような状況に陥っていた。そのため北川は本学へ赴任すると直ちに、実習で使用する御遺体の収集活動に力を注いだ。関東一円にある老人養護施設や医療施設を訪問し、医学生・歯学生にお



第 1 図 解剖学第Ⅰ講座歴代教授

左：北川 正 元教授(日本大学歯学部卒業アルバム 1980 から)、右：高城 稔 前教授(日本大学歯学部卒業アルバム 2003 から)

ける解剖学実習の重要性を唱え、献体登録者数を充足させるために尽力した。遂に、北川らの努力が実り、昭和55年に「医学及び歯学の教育のための献体に関する法律」が施行され「献体」という言葉が広く世間に認知されるようになり、御遺体の引取り数も徐々に増え始めた。現在、本学の解剖学実習において、十分な数の解剖体を学生に提供できるのも北川の並々成らぬ努力によるものであることは言うまでもない。なお、北川は歯学部学生に対して「解剖学を通じ、歯学を単に口腔や歯だけにとどめず、全身との関連において組織的に学ぶことへの重要性」を教育方針としては強調している。この北川の信念は現在も第Ⅰ講座の教育理念として受け継がれている。

高城は、歯学部で重要視すべき頭頸部の解剖に力を注いだ。特に骨学に関しては実際の骨標本を使用した演習形式の授業を行うことで、学生の理解力の向上に役立った。平成7～8年にかけて、カリキュラムの大幅な見直しが行われ、今まで第3学年で行われていた肉眼解剖学の講義・実習が第2学年に繰り下がられた。この変更によって肉眼解剖学の講義時間数も縮小したが、系統解剖学の根幹は変わらず、運動器、内臓、神経、脈管・感覚器という教科名で高城をはじめ、数名の兼任講師によって講義が行われた。一方、解剖学実習は以前とは比べられないほどの献体数の増加から、学生4～5人に一体の解剖体を供することができ、充実した実習が実施されるようになった。また、高城は大学院生の学位論文指導にも力を注ぎ、数多くの業績と門下生を輩出した。

平成23年4月からは高橋が講義と実習を担当している。特に、共用試験のCBTや歯科医師国家試験を念頭におき、頭頸部解剖に関する基礎的事項を中心としながら、歯科臨床に直結した局所解剖学の授業に力を注い

でいる。また、北川の教育理念も踏襲し、全身の系統解剖についても比較的多くの時間を割いて授業を行っている(第2図)。近年、インターネットや様々なデジタルデバイスの発展もあり、肉眼解剖学の授業も大きく変化しつつある。講義項目ごとに分かり易い資料をオンラインで学生個人のデバイスに配信し授業の効率化を図るとともに、学習効果向上のため様々な方法を取り入れている。また、解剖学実習では学生一人一人に常に集中力と探究心を待たせることに心がけ、目的意識を持って剖出にあたり、人体の正常構造について理解させることを目標とし、高橋を初め教室員一同、常に緊張感を持って実習に臨んでいる。毎年10月、築地本願寺において解剖学教育のために献体された故人の御遺族を多数お迎えし、解剖体追悼法要を松戸歯学部と合同で開催している。両学部の教職員と学生も参列し、献体くださった故人と御遺族に対して感謝の意を表すとともに、故人の御冥福をお祈りしている。

・研究について

第Ⅰ講座初代教授の北川は主に肉眼解剖学的な研究を精力的に進め、上部消化管の壁の構築とそれに分布する脈管、神経の形態学的・発生学的研究が主要な研究テーマとなっていた。また、口腔解剖学分野の研究に関しては、頭頸部諸器官における筋や神経の比較解剖学的検討、脳の発達と運動機能の関連からみた下顎骨と体肢骨の一側優位性を追求する研究を行った。さらに、唇紋、指紋、手掌紋および足底紋の発生学的研究、心臓の冠状動脈の分布および台湾先住民に関する人類学的・遺伝学的・比較解剖学的研究なども海外の研究室と共同で進められた。

高城が教授として赴任するとそれまでの研究内容・研究手法も大きく異なった。高城は、第Ⅱ講座在職中は電子顕微鏡を使用した形態学的な研究に従事していたため、当初は電子顕微鏡を用いての組織化学的な研究が主体であった。しかし、高城は純粋な形態学だけではなく、分子生物学的な研究手法の必要性を強く唱え、第Ⅰ講座の研究自体が培養細胞を使用した細胞生物学的なものへと変移した。実際に、当時、我が国の解剖学関連講座のほとんどが形態学に捕われない新たな研究手法を導入し始めていたことから、高城の先見性は確かなものであったと言える。高城は、主に歯および骨・軟骨の発生過程における基質タンパクの1つであるプロテオグリカンの発現パターンについて研究を行った。骨芽細胞や軟骨細胞の分化過程におけるプロテオグリカンの発現様式を種々の培養細胞を使用してタンパク・遺伝子レベルで研究を推進した。また、平成15年頃からは骨芽細胞の分化過程における骨基質タンパクと転写因子の発現パターンにも着目し、多くの論文を発表した。このうち、骨芽



第2図 第2学年骨学演習の風景
解剖学実習室において骨学演習を行っている様子(平成24年4月撮影)

細胞前駆細胞から骨芽細胞に分化する途中で、骨芽細胞系と脂肪細胞系の二方向性の分化系列が存在することを解明したことは大きな業績の1つである。

高城の後を引き継いだ、高橋は骨芽細胞と軟骨細胞の分化メカニズムについてより詳しく解明するため、生化学的な手法を駆使しながら研究を進めている。特に骨芽細胞や軟骨細胞の成熟・分化に関わる転写因子と他のシグナル分子間との相互作用の解明については、高橋の大きな研究テーマでもある。また、北川の時代に実施されるとマクロ的な研究も他大学との共同で実施している。このうち腸腰筋の運動様式についての形態計測学的研究は、肉眼解剖学担当講座としての位置づけを確かなものにするためにも重要なものと考える。さらに、平成26年度からは新たな研究テーマとして、脳内セロトニン生合成における律速補酵素テトラヒドロプレリン前駆体セピアブレリンの生体内の動態変化に関する生理学的な研究にも着手している。

・その他(人事関係)

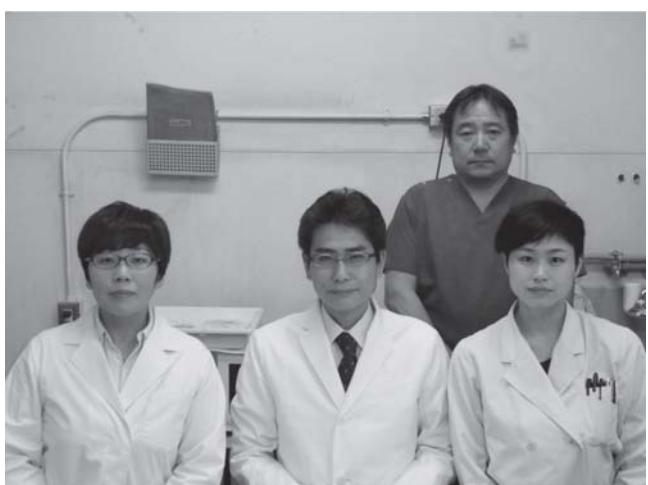
昭和47年4月に重政香代子(旧姓竹内)が、49年4月には木村澄子(旧姓浅枝)と同年9月には村松一が助手として第I講座に入室した。遺体収集業務は重信勇八が担当したが、昭和49年に病没した。そのため、昭和50年4月に安達虎平が技術員として入室、昭和60年9月まで在籍した。その後、鶴沢昭一が技術員として入室したが、平成3年1月に急逝した。昭和50年4月、島田和幸が大学院生として入室し、卒業後、助手となり、昭和57年4月に専任講師に任せられた。島田は平成元年4月に助教授に昇格したが、平成5年5月に昭和大学医学部第2解剖学教室に移籍した。なお、島田は平成10年8月に鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座IIの教授を拝命しており、退職前の2年間は、鹿児島大学歯学部長として奉職した。重政は平成12年4月に専任講師に任せられ、平成17年6月に退職したが、その後は第I講座の兼任講師として今もなお本学の学生教育に深く関わっている。木村は平成5年3月に退職して京都大学医学部解剖学第一講座へ研究員として移籍した。村松も同じく平成5年3月に退職した。北川が退官するまで、大学院生として昭和51年4月に早川博之が、昭和54年4月には木村照雄が、60年4月には小澤博道と横井淳幸が、平成3年4月には森山浩志が入室した。横井は平成元年に助手に任命されたが、平成5年8月に退職した。森山は平成5年4月に昭和大学医学部へ移籍した。

平成5年に高城が教授として着任すると同年10月には助手として本学生化学講座の大島光宏と東京都老人総合研究所研究員であった石島早苗が入室した。また、遺体収集業務担当技術員として赤池延浩が平成5年4月から入室した。大島は平成8年4月生化学講座に戻り、石

島は平成7年3月に退職した。平成8年4月、神谷直子(旧姓久布白)が、平成9年4月に漆崎斗志子が、そして平成12年には相馬美歩が助手としてそれぞれ入室した。なお、高城の第I講座への赴任にともない、第II講座兼任講師であった戸田正明、笠原陽一、景山正登、馬場徹、鈴木俊和が第I講座へ移籍し、新たに浅賀剛、野村文男、湯田雅士が兼任講師として加わり授業と実習を担当した。

平成14年1月、漆崎の退職後、同年10月1日付けて、病理学講座の高橋が助教授とし解剖学第I講座に移籍した(平成19年4月、准教授へ資格変更)。高橋は日本大学大学院歯学研究科卒業後、平成元年4月から平成14年9月まで助手として病理学講座に勤務していた。平成16年3月、相馬は退職し、同年4月には独立行政法人日本海洋機構研究員の河野広朗が助手として入室した。平成18年3月、神谷が退職し、同年4月には三上剛和と表山和樹が助手として入室した。河野は平成18年9月に退職した。平成19年10月、三上と表山が助教に昇格し、新たに、金沢大学がん研究所非常勤研究員内藤昌子(旧姓大村)が助手として入室した。内藤は、平成22年10月に助教に昇格した。高城が退官するまで大学院生として平成6年4月に山田敏弘が、その後、小野与範、李日相、熊谷徹がそれぞれ入室した。

平成23年3月、高城の定年退職にともない同年4月1日付けて准教授の高橋が教授に昇格した。平成24年7月に表山は退職し、平成25年10月には三上が病理学講座へ移籍した。内藤は平成26年4月1日付けて准教授を拝命している。平成26年4月には日本大学医学部機能形態系生体構造学分野研究員の大橋晶子が助教として入室した。平成27年3月1日現在の解剖学第I講座のスタッフは(第3図)は教授 高橋富久、准教授 内藤昌子、



第3図 現在の解剖学第I講座のスタッフ
前列右から内藤昌子、高橋富久、大橋晶子、後列 赤池延浩(平成27年2月撮影)

助教 大橋晶子、技術員 赤池延浩で、兼任講師(第4図)として前述の重政、戸田、笠原、景山、馬場、鈴木、浅賀、野村、湯田の他に本田美知子、小山宴代、伊藤 礼、長谷川宏幸、阿部伸一(東京歯科大学教授)、澤井 直(順天堂大学医学部助教)、杉山 渉(帝京科学大学教授)、熊崎敏真(大阪体育大学専任講師)らが在籍している。



第4図 解剖学第I講座兼任講師の皆さんと
兼任講師の先生方との記念写真(重政香代子、戸田正明、
景山正登、馬場 徹、野村文男、湯田雅士、浅賀 剛、杉
山 渉、本田美知子、伊藤 礼、平成25年12月撮影)